

価値と他者はどのように経験されるか：現象学的アプローチ

鈴木崇志（立命館大学）

提題要旨

倫理学の基礎概念である「価値」や「他者」は、私たちの生活から遊離しているわけではなく、何らかの仕方で私たちの日常的な経験において与えられ出会われている。そして、そのような経験の仕組みを明らかにするための方法の一つとして用いられてきたのが、現象学であった。現象学の方針を一言でいえば、経験主体である私の視点にとどまったままで経験の仕組みを説明するということである。そのためにフッサールは超越論的還元という手続きを考案したが、それを明示的に用いようと用いまいと、上記の方針は現象学者のあいだで広く共有されてきた。そこで本提題では、「価値についての経験」と「他者についての経験」に関して現象学のなかで行われてきた議論をたどることで、それら二つの経路を通じて現象学を倫理学へとつなげるための地図を描いてみたい。

第一に、価値についての経験に関しては、ブレンターノ、フッサール、シェーラーの系譜をたどることができる。ブレンターノの『道徳的認識の起源』においては、「善いもの」という概念の起源が「直観表象」のうちに見出され、そのような表象に基づいた情動における価値志向のあり方が記述されている。このように価値概念の起源を直観に求めるという発想は、基本的にはフッサールやシェーラーにも受け継がれていると言えよう。しかしすでに深谷が指摘しているように、こうした直観（直覚）主義の主張に対しては「そのようにいう君の直覚の正しさを何が保証してくれるのか」という疑問が常に投げかけられうる（深谷昭三『現象学と倫理』、晃洋書房、1991年、13-14頁）。現象学的記述が単なる日記に陥らないようにするためには何をすべきなのか、また価値の経験は規範の経験にどのように関連しているのか——こうした問題については、現代現象学の動向を踏まえつつ掘り下げていかねばならない（cf. Loidolt, Sophie. “Experience and Normativity: The Phenomenological Approach”, in *Phenomenology and Experience*, ed. by A. Cimino and C. Leijenhorst, Leiden; Boston: Brill, 2019, pp. 150-165）。

第二に、他者についての経験（他者経験）に関しても、これまでに蓄積されてきた現象学の議論は多岐にわたる。本提題においては、そのなかでも特に、フッサール、レヴィナス、ヴァルデンフェルスの系譜を取り上げてみたい。レヴィナスは、他者を経験の対象と見なすフッサールを批判しつつ、私の経験の対象とはならないが私を問いただしてくるような他者との出会いを、それでもやはり「経験」という言葉で論じようとしていた。そしてさらにヴァルデンフェルスは、レヴィナスの言うような非対称的な自他関係と通常の社会規範において想定される対称的な自他関係とのつながりを説明するために、「応答倫理学（responsive Ethik; responsive ethics）」という構想を打ち出している。本提題では、この構想が現代のドイツ語圏でどのように継承されているかを確認したうえで、その意義について考察する（cf. Delhom, Pascal. “Recent Phenomenological Ethics in Germany”, in *Phenomenological Approaches to Moral Philosophy*, ed. by J. J. Drummond and L. Embree, Dordrecht; Boston; London: Kluwer Academic Publishers, 2002, pp. 533-554）。

価値についての経験と他者についての（あるいは、他者との）経験は、おそらく切り離して考えることができない。それらの結節点を探ることは、現象学のみならず倫理学にとっても重要な課題となるはずである。